The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪の和學と契沖
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1951, 3, p. 23-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪の和學と契沖

小島吉雄

契沖の死んだのは、元祿十四年一月二十五日であります。これは旧暦の一月二十五日で、新暦に直すと、西暦一七〇一年の三月四日に当ります。契沖の亡くなつた円珠庵のあるあたりは、小橋(をばせ)の附近で、大阪の東の丘陵地帯でありまして、このあたりは今こそ大きな建物も並んでゐて全くの市中でありますが、昔の名所記で見ますと全くの郊外で、春は摘草や桃桜に賑ひ、秋は紅葉狩りの人出を見るといふ大阪人の遊覧散策の景勝地であつたのであります。さういふ土地で、しかも梅花すでに散り、桃花まさに開かんとする好季に、契沖は死んだのであります。

ところで、昭和二十六年一月二十四日の大阪毎日新聞の朝刊に、契沖の墓碑銘を奈良の高田某なる人が持ち帰つて保存してゐるといふ記事とその写真とが出てゐました。その墓碑銘といふのは、円珠庵境内の契沖の墓側に建てられてゐるものでありますが、これが戦災で破壊せられ、石碑の銘文面がひび割れして剝落したのであります。それを、その高田といふ人が持ち帰つてゐたといふわけでありますが、抑々この墓碑銘は五井蘭洲が撰したものであります。五井蘭洲といふのは、懐徳堂の教授で大阪が生んだ第一級の儒学者でありますが、若年にして懐徳堂の助教となり、後に江戸に出て三輪執斎に頼り、更に津軽の佐竹侯に仕へ、居ること九年、四十三の時致仕して大阪へ帰り、再び懐徳堂の教授となり、折ふし学主の中井甃庵が亡くなつたものですから、懐徳堂の中心となつて、その学風振興に力を尽した、いはば懐徳堂中興の功績者であります。今更に申すまでもありませんが、懐徳学といふのは、大阪唯一の漢学の学校でありまして、享保十一年に三宅石庵を中心としてその門弟相謀つて幕府の公許を得てこの学堂を建設し、爾来明治初年まで百四十有餘年間続いたもので、大阪町人の手で創設せられ、大阪町人の手で支持せられたのであります。さて、蘭洲の墓は大阪の東寺町の実相寺にありますが、元来この実相寺は住友家の菩提寺であります。蘭洲を何故にこの住友家の菩提寺に葬つたかと申しますと、住友家の分家に入江友俊育斎といふ人があつて、これが蘭洲の弟子でありましたので、自分の家の塋域に葬ることにしたのであります。入江友俊は住友友昌の弟で、通称泉屋理兵衛といひ、別子銅山の開発に功労のあつた人でありますが、この友俊は蘭洲に漢学を学ぶと共に、また契沖阿闍梨にも師事してゐたのであります。その関係で、この入江友俊が斡旋して、蘭洲に契沖の碑文を書いてもらつたのです。

一躰、五井蘭洲といふ人は朱子学者でありますが、同時に三宅石

庵、三輪執斎に陽明学をも学んでをり、また非常に博学でありまして、易にも通じ神道にも造詣あり、歴史学、兵学にも達してをり、日本の文学に深い知識を有し、和歌をも多数詠じてゐます。また、勢語通、源語提要、万葉集詁、古今通といふやうな国文の注釈書をも書いてをります。この人が、契沖に私淑し、契沖の学説を読んでをつたことは、その古今通五册を見ても分るのでありまして、これは顕昭の注や飛鳥井栄雅の栄雅抄のほかに契沖の古今餘材抄の説を参照してゐるのであります。かういふ人が契沖の墓碑銘を書いたのであります。蓋し、その人を得たと申すべきでありませう。

ところで、今も申しますやうに、蘭洲は懐徳堂中興の功績者であります。すなはち、懐徳堂二代目の学主たる中井甃庵――この人は懐徳堂の創設に非常に骨折つた人で、再三江戸へも行き、実際上の創設者といつてもよい人であります――が逝去しますると、初代学主三宅石庵の子の三宅春楼が学主となりましたが、この人は学者としては不十分な点がありましたので、懐徳堂の学問は実際は蘭洲によつて支持せられ、甃庵の子の竹山や履軒は蘭洲の薫陶を受けて成長し、そしてこの中井竹山履軒の兄弟がのちに懐徳堂の名を天下に高からしめたのでありますから、後年の懐徳堂の学風は蘭洲の学統を継ぐものといふべきであります。元来、懐徳堂は三宅石庵以来、その学問の幅の広いのを一つの特色としてゐまして、儒学のみならず、和学の素養もあつたことは、石庵が俳諧に遊び、中井甃庵が和歌和文に長じてをつたことによつても分るのでありますが、蘭洲に至つて、一層広くなり、和学の知識も一層深くなつたのであります。蘭洲の父の五井持軒は大阪生れの近世最初の儒者でありますが、下河辺長流に歌学を学んでをります。蘭洲の和学も父に影響せられるところが尠くなかつたらうと思はれます。ともかく、蘭洲は大阪の和学の方でも重要視すべき人物であります。これだけ申しあげて来ただけでも分りますやうに、漢学塾たる懐徳堂と大阪の和学との関係は相当に深いのであります。さきほど申しました入江友俊も和学と漢学との両胯をかけてゐますが、かういふやうなのは、ほかにも多いのでありまして、懐徳堂創設者の一人である富永芳春（道明寺屋吉左衛門といひ醤油製造を業とす。富永仲基の父）も上代様仮名を能くしたと申しますから、多分和学をも学んだのであらうと思ひます。そして、友俊や持軒や蘭洲らの例によつても分りますやうに懐徳堂の和学は契沖と関係が深いのであります。

なほ、契沖の直接の影響は受けてをりませんが、明和安永頃に大阪の歌人として有名だつた人に加藤景範といふ人があります。号を竹里（たかさと）と言つて本業は薬種屋でしたが、この人もやはり和学と漢学とを兼習した人であります。五井蘭洲が懐徳堂で教授をしてゐた頃の学主に、さきほども一寸申しました三宅春楼がをりましたが、その春楼の学主となりました時に出来た宝暦八年八月の懐徳堂規約の附記に連署致してをりまする門下生の中に、小川屋喜太郎といふ名が見えてゐます。この小川屋喜太郎といふのが即ち加藤景範でありまして、この通称の喜太郎といふ名の名附親が、京都の人で江戸に塾を開き大阪にも屢々講義に来て懐徳堂とも関係の深かつた三輪執斎であります。執斎もまた和歌に長じ、和学に深い造詣をもつてゐましたが、加藤景範はこの執斎に名をつけてもらひ、そして執斎の弟子の五井蘭洲に教へを受けたのであります。またこの人は富永芳春にも弟子入りして上代仮名を学びました。かういふ関係で、この人は懐徳堂と非常に関係が深いのであります。享保五年五月朔の生れ

で、寛政八年十月十日に七十七才で歿しました。加藤景範入門誓盟録といふのには、一千数百人の門入の名が連ねられてゐるといふことでありまして、大阪に於ける歌人学者として非常な勢ひをもつてゐたのでありますが、その和歌は京都の堂上歌人に学んだのであります。この人には、「国雅管窺」「和歌虚詞考」といふやうな著書もあり、その他いろいろなものを書いてゐます。その中に、自筆写本で伝はつてゐるものに「新古今集旧注補遺」といふ本がありますが、これは儒学思想の影響を受けてをりまして、儒学的見地から北村季吟の八代集抄の説を批判した新古今集の注釈書であります。尤も、注としては幼稚なところもありますが、ともかく自由な捉はれない立場に立つて批判してゐる所謂自由討究の態度は注目すべきであるばかりでなく、また、その書の終りの方に新古今集の異本のことにも触れてをりまして、このやうに、新古今注釈書で異本校定とか本文批評とかの問題にふれてゐるのは、徳川時代としては珍しいことであります。

総じて、懐徳堂の学風は、知識を広く求めて、一つの学派に偏せず中正を守るといふのが、創立以来の特色でありまして、その初代の学主であつた三宅石庵の如きは、その根源は陽明学でありながらしかもなほ朱子学をすてず、またその他の諸説を併せとつて、そのよろしきに従つたために、世間からは鴟学問といはれたほどであります。それから、また石庵のえらいところは、中庸の本文批評にすぐれた創見を立てたことであります。中井履軒の中庸雕題といふ書物によりますと、石庵は中庸錯簡説を唱へて、その第十六章は第二十四章の後に入るべきだと言つたのでありまして、これは非常な卓見だとされてゐます。博く学んで、これを自由に批判し中正を得るといふことは、やはり自由討究の学問精神でありまして、傍らまた本文批評にすぐれた眼識を示してゐるのであります。このやうな傾向は石庵のあとを受けた懐徳堂代々の教授の上に見られる所でありまして、これが懐徳堂の学問の大きな特色になつてゐます。わたくしは、加藤景範の注釈書に示されてゐる自由討究の精神や本文批評への着眼といふやうなことも、またこの懐徳堂の学風のおのづからなる影響であらうと思ふのであります。

以上述べ来りましたとほり、懐徳堂と大阪の和学との関係は深いのでありまして、両者が互に影響し合ひ交流してゐる点が尠くないのであります。しかも、前述の如く、懐徳堂の和学には下河辺長流や契沖阿闍梨の投影があるのであります。

元来、大阪には町人で学者たる人が多いのであります。わたくしの今日の話は和学でありますから、その方に重点をおいて申しあげてみましても、いま申した加藤景範がやはりその一人でありますがこのほかにも、たとへば契沖の弟子の海北若沖——この人は十七八才の頃から契沖に師事して相当に業績をもつてゐる人ですが、これがまた玉造の垂水屋といふ商人であります。また紀海音——これは純粋の学者とは言へないかも知れませぬが、海音も契沖の弟子で、やはり町人の出であることは先刻ご承知のとほりであります。和学でも漢学でも大阪には町人の学者が多かつたのであります。その関係からでもありませうか、大阪の和学は、所謂国学とは違つた特色をもつてゐます。わたくしは、さきほどから大阪の古典学のことを和学といふ言葉でもつて言ひあらはして、国学とも古学とも申しませんわけは、大阪の古典学は所謂国学とか古学とか呼ばれてゐるものとは性質を異にする点がありますので、それと区別するためだつ

たのであります。それでは、大阪の和学はどういふ特色をもつてゐたかと申しますと、学者によつて幾分の例外はありませうが、大躰のところを概括して申しますと、第一に、比較的捉はれない見地に立つて知識を広く求め、一つの主義主張に執しない、自由討究的、批判的態度の濃厚であつたことであります。そして、所謂古学者的臭味が少く、神ながらの道とか古道とかいふものを固執せず、漢学でも仏学でもこれを排斥するやうな偏狭なところがなかつたやうであります。むしろ、大抵の和学者は、漢学の素養深く、また諸学にわたつてをるのであります。大阪の和学者は漢学に通じ、大阪の漢学者は和学に通じ、しかも両者ともに偏狭でなかつたのが特色であります。所謂近世の古学者とか国学者とかいふ人々は、古道を明らめるために古典を考究するのでありまして、古道といふものに拘泥して、漢学や仏学を排斥し、偏執的なところがあつたのでありますが、契沖をはじめ、その系統を引く大阪の和学には、さういふところがなかつたのであります。大阪の古典学者は、古典を読み解くといふことに重心を置く態度でありまして、また和歌和文を作る参考に古典を学ぶといふ傾向も見られるのであります。それから、また古典の原典に直接に当つてゆくといふ態度を示してをります。従つて文献的であり、実証的であるといふこともその特色であります。それから、異本の校定や本文批評に着眼して、注釈鑑賞の上にそれの成果を応用しようとしてゐる点がまた重要な特色であります。更にもう一つ、その注釈鑑賞のあとを検討してみますと、大阪の和学者は比較的古注を重んじ、古注から出発し、古注につながりをもつてゐるのであります。これは、さきほど申しました加藤景範の新古今集の注釈ぶりを見ましても、北村季吟の八代集抄を基礎にしてをります。契沖に致しましても、古注を多く参照致してをります。この点は、真淵や宣長と違つてゐる点でありまして、真淵や宣長は一往古注を全面的に否定するのでありまして、その否定するところから新しく出発してゐるのであります。わたくしの考へでは、真淵宣長らの新注は合理的といふことを尺度にして古典を解釈しようとする傾向がある。それが学問的には敬服すべきいろいろの立派な業績をあげてゐるわけでありますが、かういふ合理的な解釈が時には古意を誤り伝へることもあるやうであります。古典の本来のあり方から逸脱してゐる場合もあるやうに思はれるのであります。古注にもまた信ずべき点があり、案外馬鹿になりません。古注にも、もちろん詰らないものもあります、しかし、中には古い時代の生活感情に直結してゐる場合もすくなくないやうに思はれるのであります。従つて、その作品の真生命に触れた解釈もあるのでありまして、古注だからと言つて必ずしも軽視出来ないと思ふのであります。わたくしは自分の専門とする新古今集の注釈を調査致しました結果から類推してかやうなことを申すのですが、新古今集のみならず源氏物語とかその他の場合にも、かういふことが言へさうに思ふのであります。ところで、大阪の和学者は、古注を基礎とし、その上に自分の新しい見解を築いてゆくといふ傾向があるのであります。以上が大阪和学の特色であらうかと思ふのでありますが、かういふのは、大阪の和学者のいづれもが大なり小なりもつてゐる傾向であらうかと思ふのであります。さて、かういふ大阪の和学の源泉が契沖であります。そして、契沖こそは大阪の和学の代表者であります。契沖の学問学風の上には、右に申し述べましたやうな大阪和学の特色がもつともはつきり現れてをるのであります。契沖の学問については、

何れ後ほど諸先生からお話があることと存じますが、所謂国学者の連中のとは違つてをります。契沖は儒学や仏学を排斥しないばかりでなく、儒仏神等を広く渉猟して自分の学問の上にそれを摂り入れてをります。また、本文批評の問題にも取りくんでをり、また古注を基にして自分の説を立ててをります。契沖は飽くまで言語学的な学問方法をとつてゐまして、文献的であり、実証的であります。いろいろな点で、いま申し述べましたやうな大阪和学の特色を発揮致してをるのであります。しかも、その契沖の学問学風が大阪の和学のみならず、漢学の方にも影響したかも知れぬといふことは、懐徳堂と和学との関係を考へることによつて推察せられるのであります。

ともかく、大阪の和学界に及ぼした契沖の影響は相当大きなものであつたらうと思ふのでありますが、ひとり大阪の学問に対してのみならず、全国の学問に大影響を与へてをります。そのことは、久松博士の契沖研究にくはしく出てをりまするが、春満・真淵・宣長らをはじめ近世の国学者はみな契沖の影響を受けてをります。あの有名な宣長の物のあはれ論なども実は契沖に淵源するのであります。また、その他の反宣長派の人々にも影響してゐます。蓋し、契沖はひとり大阪の契沖であるのみならず、実に天下の契沖であります。

然るに、契沖との因縁浅からざる懐徳堂は、明治末年に大阪財界の支持により、懐徳堂記念会を結成してその遺業を顕揚して今日に至つてをります。また、唯今は申しませんでしたが、大阪には緒方洪庵の適々塾があります。これは日本に於ける洋学の濫觴地でありまして、全国から有為の青年が集まつて来て、ここに学んだのであります。幕末から明治にかけての日本文化を双肩に荷つた人々が、この塾から沢山出たのでありまして、福沢諭吉などもここの出身でありますが、この洪庵の適々塾は今も旧形のまま保存せられてをりまして、大阪大学がこの管理に当つてゐるのであります。和学でも漢学でも又洋学でも近世大阪の占める地位はまことに重要なのであります。その中で、洋学と漢学とは、大阪人の手によつて、今なほ遺跡を保存してゐるのですが、契沖を中心とする和学に対しては、今日まであまり力が致されてをりません。今日契沖の円珠庵が戦災を蒙つたまま、これもまだ復興が出来てをりません。契沖の日本学は日本全体のものであり、契沖は日本の契沖であります。そこで、このたび契沖二百五十年忌を機会に契沖の餘沢を蒙る全国の学界有志が相図り、その復興を企てたのであります。即ち、大阪の諸君の御協力をまつこと切なるものがあるのであります。

懐徳堂復興に際して懐徳堂記念講演会を開きましたその故智にならつて、ここに円珠庵復興後援会の成立に当り、この記念講演会を催し、久松・沢瀉両先生にそれぞれ御専門の蘊蓄を傾けて頂くことになりました。わたくしは、まづその前座をつとめた次第であります。（これは昭和二十六年一月二十六日大阪朝日新聞社講堂に於ける契沖阿闍梨記念講演会の講演要旨である。）